

中国文化財返還運動 を進める会 ニュース

NO. 6

中国文化財返還運動を進める会 <https://cbunkazaihenkan.com/> **2023/10/10**

〒105-0003 東京都港区西新橋1-21-5 一瀬法律事務所 / TEL. 03-3501-5558 / Mail: info@ichinoselaw.com

***本会にぜひ入会を！ カンパを！** 郵便振替：00120-7-636180（中国文化財返還運動を進める会）
正会員年会費（個人）1000円・（団体）3000円／賛助会員（個人・団体）1口1000円（1口以上）

8月、進める会の有志メンバーが訪中、 市民交流と現地調査を行いました。

8月12日から18日にかけて、私たち「中国文化財返還運動を進める会」の有志7名は、中国の関係者の方々の尽力で、遼寧省鞍山市海城、及び大連市旅順を中心とする、現地調査と交流の機会を得ました。これは私たちの会のメンバーと、現地の方々とが対面で意見交換する、最初の貴重な機会となります。

私たちは、何よりもまず、文化財が略奪された現場をこの目で見て、まずはその場所で起こったことを理解するという「自己教育」の場として、この機会を活かしていきたいと考えました。その上で、現地の方々と忌憚のない意見交換をすることができれば、大切な一歩を踏み出すことができるだろうと。

事前のビザ受給など、若干手間取るところはありましたが、8月12日昼、私たちは無事に大連国際空港に降り立つことができました。ここで私たちは、北京に本拠を置く「中国民間対日賠償請求連合会」（連合会）の崔宝娟さんの出迎えを受けました。連合会はいわば私たちの運動の「カウンターパート」ともいえる民間団体で、本会の一瀬弁護士とは、中国人戦争被害者の戦後補償裁判などで、長い協力関係にあります。今回は、全体のアレンジや現地グループとの連絡、車やホテルの手配など全般にわたって大変お世話になりました。崔さんはずっとツアーに同行し、通訳も務めていただきました。

ここで上海大学流出文化財研究センターの陳文平さんも合流し、私たちは大連北駅から高速鉄道（新幹線）に乗り、海城西駅まで移動しました。海城では市内のレストランで、現地グループ代表の姜学東さんをはじめとする皆さんによ



石獅子が奪われた三学寺の門前で（8月13日）

る歓迎の催しもたれました。

翌13日の午前中は、海城市博物館を見学予定でしたが、あいにくの台風の余波で休館となってしまいました。私たちはホテル内で姜学東さん、連合会の王錦思さんたちを交えて意見交換を行いました。これには、別ルートで海城入りした、北海道大学法学研究科の吉田邦彦さんも同席しました。姜さんからは三学寺をはじめとする海城の地域史が説明され、王さんからは彼が長年収集してきた写真や文書資料をもとに、日清戦争時期の海城について解説されました。

午後には幸い雨も上がり、いよいよ三学寺を参観。門前に、奪われた石獅子の代わりに（？）新しい獅子像が置かれていますが、これは90年代に寺が整備されたときに置かれたものということです。事前には、構内に入れるかど

●訪中日程表 (2023.8.12 ~ 8.18)

8月12日 (土)	
午後	大連国際空港着 大連北駅→海城西駅→海城市内
夜	海城市民との交流会
8月13日 (日)	
午前	海城市民との意見交換会
午後	三学寺・山西会館など見学 日清戦争戦跡見学
夜	海城市民との交流会
8月14日 (月)	
午前	日清戦争と海城石獅子返還シンポジウム
午後	海城西駅→瀋陽駅 瀋陽故宮博物院見学 瀋陽北駅→大連駅→大連市旅順

8月15日 (火)	
午前	旅順日俄監獄旧址博物館見学
午後	唐鴻臚井碑返還シンポジウム
8月16日 (水)	
午前	旅順・白玉山塔見学
午後	旅順博物館・二〇三高地など見学 孫彦華氏農園で鴻臚井碑のレプリカを見学
8月17日 (木)	
午前	中国民間対日賠償請求連合会との意見交換会
午後	旅順萬忠墓博物館など見学 大連市中心部の「唐鴻臚井刻石研究会」事務所訪問 中山広場周辺見学
夜	大連市民との交流会
8月18日 (金)	
午後	大連国際空港発

うかわからないと言われていたのですが、当日は無事に門も開けてもらうことができ、安僧法師という尼僧の方からお話を聞くこともできました。その後、近くにある山西会館を見学し、そこに置かれている石獅子を見ました。詳しくは東海林さんのレポートを見てください。その後私たちは、日清戦争の激戦地（市街戦）であった牛荘を見学。日清両軍が対峙した太平橋は、都市近郊の緑豊かな場所にありました。

14日午前中は、「日清戦争と石獅子返還運動」に関するシンポジウム。本会からは一瀬、辻子がこの間の活動について報告し、また東海林、鄧捷、五十嵐から、本会の「ブックレット」で展開した内容が紹介されました。

なお、会場に向かう途中、かつての「海城神社」の跡地と思われる「海城市烈士記念館」の外観を見ることができました。前日、姜学東さんにご教示いただいた場所です。もともこの地は、祖先祭祀をする場所だったということで、そこに日本によって侵略神社が建てられ、新中国になってから革命と抗日戦争の「烈士」を記念する場所になったということで、ある種の連続性を強く感じさせるものでした（これについて詳しくは、辻子さんの原稿が「靖国・天皇制



海城でのシンポジウム終了後の記念撮影 (8月14日)

問題情報センター」のニュースレターに掲載予定だそうです)。

午後は高速鉄道を北上して瀋陽に入り、瀋陽故宮博物院を参観しました。本来は



旅順日俄監獄の拷問室 (8月15日)

九一八記念館に行く予定だったのですが、月曜日は休館だったので、急遽変更しました。博物院は信じられないくらいの観光客でごった返していました。その後瀋陽北駅から高速鉄道を南下。2時間かけて大連駅へ引き返します。ここから旅順のホテルに移動しました。

8月15日・16日の旅順での行動については大賀さんの報告に譲ります。「旅順日俄監獄記念館」の監房や拷問室、処刑施設は胸に迫り、別棟で陳列されていた、日露戦争時の日本軍の慰霊碑・記念碑の類も興味深いものでした。また、旅順博物館（旧関東庁博物館）には、大谷探検隊関連の展示もありました。

8月17日は、まず午前中、ホテルで連合会の童増さんたちとの意見交換会を持ちました。それぞれの暮らす社会の中で、この運動を進めていく上での、それぞれの課題と困難さなどについて、率直な意見交換ができたと思います。連合会からは、裁判など直ちに現実化することは難しい提案もありましたが、今後の共同の第一歩として、民間の共同宣言を起草することが提起され、合意しました。これについても別稿を参照してください。

この日の午後は、旅順市内にある「萬忠墓」へ。ここは



旅順虐殺の慰霊碑・萬忠塔（8月17日）

日清戦争中に日本軍が引き起こした旅順虐殺の死者を埋葬した墓地で、通称「万人坑」。併設されている記念館を見学しました。大連

中心部に移動し、唐碑返還を求め大連のボランティアグループの事務所を訪問して、代表の姫巍さんたちから活動の内容を伺いました。その後は、事務所のすぐそばにある中山広場を取り囲む、「満洲時代」の建築群を眺め、人民路（かつての「山縣通り」）近くのレストランで交流会がもたれました。

今回の訪問は、わずか1週間たらず、駆け足で走り抜けたという感があります。それでもやはり、行って見て初めてわかったことというのは多々あり、充実した経験であったと思います。

もちろん、写真で見ただけの（それも古い写真で）三学寺を実見できたこと、山西会館の石獅子が、靖国のその「生き別れ」た兄弟にしか見えなかったこともあります。しかしそれだけではなく、中国における運動状況、今回の私た

ちの訪問がひとつの機縁となって、中国における運動のある種の「刺激」となっているということも感じました。

中国における文化財返還運動は、その考え方や運動の方向性についてもかなり多様であり、同じ地域においてもいくつかのグループが併存しているようです。それは、学術的な論争も関係しているように見えました。また中国において、官製ではない民間の運動を進めていくことの特有の困難性というものも、強く感じざるを得ませんでした。そういう中で、政府によって陰に陽に政治的な圧力をかけられつつも、国内における運動空間を広げるために努力してきた連合会が、今回の私たちの訪問をひとつの手がかりとして、現地の運動と出合い、新たな運動を模索していることも強く印象づけられました。他方、中国側から示された「期待」に比して、日本側の運動のあまりの「落差」をも思わざるを得ませんでした。それは何より、課題の大きさに対する主体の力量という問題です。

まずはこれまで進めてきた活動を継続し、今回の中国訪問で得た成果も返していきながら、日本社会に暮らす私たちの責任というものに向き合いたい。文化財返還という角度から植民地主義と侵略戦争という過去の清算を果たすことをめざす私たちの運動のあり方を、引き続き考え続けていきたいと思います。

（新 孝一）

海城・三学寺を尋ねて

1. はじめに

今回の訪中で、日本の「狛犬」は中国では「石獅」と呼び、石獅は両方とも口を開けているのが多いことが解った。ここでは、石獅子を使用する。

* 靖国神社の石獅子

台石には、次の刻銘がある（縦二字分かち書き）。

雌獅子 直隸保定府深州城東北得朝村李永成啓献獅子一對

雄獅子 大清光緒二年閏五月初八日敬立

大清光緒二年は1876年のことである。刻銘から中国由来の石獅子であること、その来歴は賀茂百樹「天覧に輝く靖国神社狛犬のこと」(『皇国時報』第518号 1934年)に、〈獅子大之分は如何にも新調物に而見苦敷青石之分は時代も有之候處生憎壹對之もの無之病院之寺門前に青石之分四つ有之候へ共何れも大小之差甚敷候ゆへ此内見形り宜しきもの壹つ外に白石に而時代有之もの壹對調達之上去る（1895年



写真1 正面が三学寺の山門、その手前に石獅子が一對、両端に仏塔の一部

6月) 10日營口へ向けて運搬取計ひ申候)と、当時、野戦病院に充てられた、現在の遼寧省鞍山市海城の三学寺門前の石獅子に触れている。青石一つは山縣記念館、白石一對は靖国神社にある。



写真2 境内にある「宣揚盛業」碑

2. 三学寺のこと

* 現況

大きな道路から山門に至る参道両側に仏具店が並び、山門前に1990年以降に設置された石獅子が一对(写真1)。その両外側のやや離れた場所に、これも新しい四連仏塔が鎮座。通用門近くの壁に「(遼寧)省級文物保単位 1988年12月20日公布」の石板がはめ込まれている。字数の関係で境内の様子は省略せざるを得ないが、大雄寶殿の手前の両側に「宣揚盛業」(写真2)と「表著宏施」の石碑がある。前者の側面冒頭に「重修三学寺碑記」、最後に「大清光緒甲申年壬申月癸卯日」とあり、甲申年は1884年、壬申月は9月(陰曆7月)。後者には「大清光緒十年歲次庚申七月初」とあり、光緒十年も1884年である。両碑とも同年に立てられ、この時には石獅子は存在していたことになる。

前者の側面冒頭に「重修三学寺碑記」、最後に「大清光緒甲申年壬申月癸卯日」とあり、甲申年は1884年、壬申月は9月(陰曆7月)。後者には「大清光緒十年歲次庚申七月初」とあり、光緒十年も1884年である。両碑とも同年に立てられ、この時には石獅子は存在していたことになる。

* 変遷

唐代に建立された古刹で、近代以降は次の通りである。1897年、寺をキリスト教会に売り、仏像などを撤去。1905年、師範学堂、さらに県立中学校として改築。中華民国期に入り、裁判所として使用。1949年の中華人民共和国建国後、一時的に倉庫として使用後に、海城県図書館に。文化大革命(1966~76年)による破壊。1988年、寺院の僧侶による正式な接收管理が始まり、仏教活動の場所として本来の姿を取り戻す。現在の寺院は1990年代に修復したもの(鄧捷「中国側の資料から見た靖国神社最古の狛犬」本会編『中国文化財の返還』やWeb等による)。

* 石獅子はどこにあったか

現在の石獅子が置かれている付近と思われるが、その他の石獅子はなかった。当時は、数が多いことから、両仏塔の位置か広い参道の両側も考えられるが、それを裏付けるものはなかった。

3. 山西会館の石獅子

三学寺から近い位置に山西会館があり、その正門前に石獅子一对。見た瞬間、靖国にある石獅子に似ていると思った。刻銘はなし。雌獅子の幅約76cm、高さ約135cm、台座高88cmで、靖国の雌獅子は幅約86cm、長さ約133cm、

高さ約140cm、台座高88cmで、ほぼ同じ大きさ。

また、Webで「山西会館」を検索したら、王錦思さんのコレクション「海城西門外我砲兵聯隊本部」と同じ写真が出てきた。Webの写真(写真3)には本来の題やキャプションはない。キャプションは、〈海城西門の外、関帝廟の側山西会館の大建築あり。我が砲兵某聯隊は假りに本部を其内に置く。〇〇(判読できず)一二書したる旗は其の門前に掲げるなり。有力城壁の上に聳ゆるは西門の城楼なり〉と。発行年月日の記載はないが、日清戦争当時のものと思われる。現在、西門の城楼は失われているが、石獅子は写真のままである(写真4)。

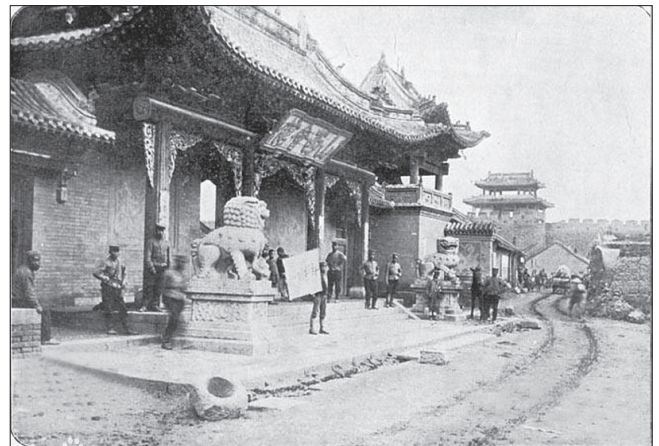


写真3 「海城西門外我砲兵聯隊本部」



写真4 現在の山西会館

4. 奉納者・李永成について

現在靖国にある石獅子の台石に刻まれた「直隸……」は、現在の河北省保定市内と推定できる。王錦思さんは李の姓が多い地域で、家系図にあたって探したが、「永成」にはたどりついていないと言う。また、保定市曲陽県は石工による彫刻が盛んな地域だと、王さん、崔宝娟さんから教えていただいた。ただ、海城とは500キロ以上離れており、当時の交通事情を考えれば、曲陽で石獅子を作り、運んだとは考えられない、と王さん。

(東海林 次男)

唐鴻臚井碑の跡地を 旅順港口から遠望する



旅順で行われたシンポジウム（8月15日）

1週間の日程の後半、8月15日に訪中団は、大連の「唐鴻臚刻石記念館」の楊岳有館長らとのシンポジウムに参加。78年前のこの日には、日本の敗戦を確定したポツダム宣言の受諾がラジオ放送されている。

私たちは午前中に、旅順にある日俄監獄（日本とロシアにより建設され、使用された監獄）の記念館を見学し、ホテルに戻って昼食を済ませた後、午後のシンポジウムのための会場・太陽溝書院に向かった。シンポジウムは「唐鴻臚刻石記念館」副館長の劉勇さんの司会で、午後2時過ぎに始まった。参加者は中国側16名、日本側は7名全員が参加。

シンポジウムの冒頭、楊岳有さんが2017年9月に大連に唐鴻臚刻石記念館を設立した経緯、目的などを話す。続いて北京でのシンポジウムに出席され、大連に前日戻られた孫国田さんが、鴻臚井碑に関連するパワーポイントとともに、石碑の歴史的経緯について語られた。

次に、太陽溝書院の院長であり、この日の会場を提供された尚殊妃さん。流出文化財のTV番組に関わった経過、自国文化に自信を持つことの大切さなどとともに、これまでの日中友好の交流の経験を語った。彼女は海城の生まれで、石獅子の返還にも関心を持っていて、この間、自国の国宝に対する認識が深まり、自信を取り戻したいという思いを語った。そのためには、民間での日中間の交流が大事であること、来年は大学で中国の茶道について、海外からの留学生に教える予定であり、今回の研究会を通してもっと深い日中間の交流を実現したいと述べ、鴻臚井碑の絵柄が描かれた切手などを、日本からの訪問団全員に手渡した。

その後、本会の一瀬弁護士が、日本の返還運動の設立経緯を以下のように説明した。2018年1月、唐碑亭の話を、「中国民間対日賠償請求連合会」の崔宝娟さんから聞き、その年の8月に大連に来たこと、その後、王錦思さんが靖国神社に手紙を出して、石獅子（狛犬）の返還を求めたことを

知り、その活動に日本側で連帯するべきだと考え、当面する課題としてこの2つの文化財の返還の実現を目的に運動を進めていくことを呼びかけた、と述べた。

続いて私から、10分程度の時間を頂き、皇居に保管されている鴻臚井碑と唐碑亭について、昨年「進める会」で発行したブックレットに書いた内容について報告をした。

この日のシンポジウムでは、ほかにも歴史・文化関係の現地研究者である王珍林、李華家、黄明超、王徳亮さんたち、そして「連合会」の王錦思さんなどから中国での活動が報告され、7時近くにシンポジウムを終えた。

翌16日の午前には、旅順の軍港が眺望できる海拔66.8mの白玉山に登って、約2キロ先にある黄金山麓の唐鴻臚井碑跡地を眺めた。白玉山塔は、日露戦争後に東郷平八郎と乃木希典が発案して1909年に戦没者追悼のために忠魂塔として建立。当時は「表忠塔」と命名されたが、中華人民共和国となってから「白玉山塔」と改名された。

またこの日の午後には、孫彦華さんが自分の農園内に設置した唐碑亭のレプリカを見学した。

翌17日午後には、旅順萬忠墓博物館など見学した後、大連中心部に移動し、大連市民らが結成した唐鴻臚井刻石研究会を中山広場近くの事務所に伺い、研究会代表の姫巍さんや市民らと懇談。その後、中山広場を囲む日本占領当時の建物の幾つかを見学し、近くのレストランで懇親会を持った。

なお鴻臚井碑は、713年、唐が渤海王を「渤海郡王」に冊封した事実を記録した石碑で、初め渤海領土（現中国遼寧省大連市旅順）に建てられていた。日露戦争で旅順を占領した日本軍によって1908年、日本に搬出された。そして今も、日本では皇居の非公開の場所に置かれている。

（大賀 英二）



旅順・白玉山塔前の展望台から、鴻臚井碑の跡地（左上の半島の先端付近）を望む（8月16日）

日中民間運動の協働をめざして

中国民間対日賠償請求連合会・童増さんたちとの意見交換

今回の訪中最終日前日の8月17日、旅順のホテルにて私たちは、「中国民間対日賠償請求連合会」（連合会）の皆さんとの会議を持ち、意見交換をしました。

私たちからは、日本で返還運動を始めた経緯と現状の報告を行い、中国側からは、中国でさまざまに取り組みはじめている文化財返還の運動と、これに対する連合会としての認識を聞くことになりました。以下、連合会会長・童増さんの発言の一部をご紹介します。

*

皆さんの正義の行動がなければ、ここまで運動を進めることができませんでした。日本で出されたブックレットの副題にある「私たちの責務」という言葉が、すごく印象的でした。今回の私たちのこの交流については、中国政府も注目しています。将来的には、世界的にも注目されるようになると思えます。

返還問題を解決するために一番重要なのは、中国政府が直接日本政府に対して、返還要求の主張を行うことです。私たちは、この目標に基いて中国政府に対して提案とか、話し合いを進めることに努力しています。

私たちの連合会は、本当の意味での中国のNGO組織です。NPOじゃなくてNGO。連合会は正規の登録団体ではありませんが、実際的に中国政府に存在を認められている、唯一の民間組織です。

次の突破口を開くための私の考えは、訴訟・裁判をすることです。もし日本で裁判が始まれば、私も中国国内で裁判を起こすつもりです。

私の経験では、中国社会で民間の運動を行うとしても、ただ自分たちの活動をしているだけでは難しい。大きなアクションを起こして、みんなの目を集中すれば、政府もその運動をプッシュしていかざるをえません。例えば私たちが日中民間で「宣言」を出すなどの共同行動をし、それをメディアが報道することで、海城市の市民や旅順の市民も、そこに結集することができる。もし、日本政府に対する裁判が提訴されたならば、海城市や旅順市の市民が、そこに集中して力を合わせるができるようになる。

正式な手続きを通して下から上に、順を追って返還運動を進めていこうとしても100%だめです。政府は返還運動というのは政府がやることだ、民間人がやることじゃないと見ていますので、拒否されることは間違いないです。「共同宣言」や「裁判」のように、最初にまずアクションを起こしてはじめて、その後、いろいろな知恵や力を集中していくことができます。

行動する前に、どこから始めるのか、とても重要です。



連合会との意見交換会（左2が童増さん）

今の時代は、戦争被害者とか、掠奪文化財に関していろいろ努力することが、大変に難しいところですが、皆さんの活動はとてもありがたいことです。

私たちは共同の理想のためにいろいろ頑張っていると思います。それはやはり、未来の世界に向けた重要な行動なのです。

最終的に目標に達成できるかどうか、成功できるかどうか、その困難さはわかっています。しかしそのことを別にして、行動することだけでも、大変意味あることだと思います。（以上まとめ文責・大賀 英二）

*

この日の意見交換をふまえ、私たちは民間交流の第一歩として、連合会と進める会との「日中民間共同宣言」づくりを始めました。

ひと月あまりにわたって双方で文案をやりとりし、意見交換しながら何度か修正を重ね、9月29日付で以下のような合意文書を発表しました。

中国文化財の返還を実現するための日中民間共同宣言

日本は、日清戦争以降約半世紀にわたって、中国に対して数度にわたる侵略戦争と植民地侵略を行い、中国各地から膨大な数の石像、石碑、青銅器、陶磁器、仏像、書籍、絵画などの文化財を奪いました。

私たち「中国文化財返還運動を進める会」（日本）と「中国民間対日賠償請求連合会」（中国）は、「日本が奪った中国文化財を元の場所に返還する」運動を展開しています。

日本と中国は隣国であり、2000年以上にわたって文化交流を主軸とした友好関係を築いてきましたが、19世紀後半、日本はアジアに覇権を唱えて軍国主義の道を歩み、

中国を含むアジア諸国を侵略し続け、アジアの人々から数千万人もの命を奪い、さらに多くの貴重な中国の文化財を日本に奪い去りました。

悲惨な歴史を消し去ることはできず、虐殺された命や焼失した財産を取り戻すことはできませんが、いまなお日本に不当に持ち込まれた中国文化財を「元の場所」に戻すことは可能です。

「奪われた文化財を元の場所に戻す」というのは、現在日本（文化財が本来所属していたところではない場所）にある中国文化財の本来の価値をとり戻すことです。また、文化財を「元の場所に戻す」この運動は、1972年の日中共同声明でうたわれた「両国間の恒久的な平和友好関係を確立する」という理念に沿うものであり、日中両国の平和と友好の実現に寄与するものです。

当面、私たちの運動は、「戦利品」として日本に奪われた2つの文化財の返還を目指します。ひとつは、日清戦争中に中国遼寧省海城市の三学寺から奪われ、現在、日本の靖国神社と山縣有朋記念館に存在している中国の石獅子であり、もうひとつは、日露戦争中に遼寧省大連市旅順口から奪われ、現在、日本の皇居に存在している唐鴻臚井碑とそれを保護する碑亭です。

進める会のホームページを開設しました。

デジタル化を図る一環として、このたび、中国文化財返還運動を進める会のホームページを開設いたしました。

ホームページで様々な情報を公開することにより、中国文化財返還運動についてより多くの方々へ周知し、ご支援を頂ければと考えています。そして、ホームページをご覧になった方々のご知恵を拝借し、中国文化財返還運動を一歩前に進めるきっかけになれば幸いです。

ここでは、サイトの構成や機能についてご紹介します。

- ①ホーム：会の最新活動が分かるほか、最新のニュースレターや中国からのメッセージもご覧いただけます。
- ②私たちについて：定款（抜粋）、共同代表、連絡先等会の基本情報が掲載されます。
- ③取組内容：講演会、返還交渉、訪問見学、記者会見、訪中記録の5つの項目で、会の今までの活動内容をお伝えします。
- ④報告書・発行物：ブックレット等、会の発行資料のほか、文化財返還をめぐる論文をWebで閲覧、ダウンロードすることができます。
- ⑤入会のご案内：会員の種別・会費や入会の申し込み方法をご案内するページとなります。
- ⑥関連情報：メディア報道、文化財返還に関するサイト

この「奪われた中国文化財を元の場所に戻す」運動を進めるために、私たち日本と中国の市民は、それぞれの社会で、メディアなどの広報、学術研究、国際交流などの分野で行動します。また、脱植民地化運動の一環として、アフリカなど各地から奪われた文化財の返還を求める国際的潮流との連携、中国以外の朝鮮半島を含む対日文化財返還運動への積極的な協力も追求します。

これらの活動を通じて、私たちは日中両国において奪われた中国の文化財の全面返還を求める日中間の世論を促進していくことを提起します。

以上の構想に基づき、私たち「中国文化財返還運動を進める会」と「中国民間対日賠償請求連合会」は力を合わせて行動し、中国文化財の返還を実現させることを、ここに宣言します。

2023年9月29日

中国文化財返還運動を進める会（日本）

共同代表：五十嵐 彰・瀨瀬 厚・東海林 次男・藤田 高景
中国民間対日賠償請求連合会（中国）

会長：童 増

やブログにリンクできます。

また、情報公開のほか、ホームページにての申し込み機能を設けましたので、ぜひご活用ください。

- ⑦活動参加への申し込み：今後の活動予告もホームページを通じて公開される予定で、参加をご希望される方はホームページで事前に申し込むことが可能になります。
- ⑧オンラインでの入会申し込み：入会申込書のダウンロードはもちろん、入会申し込みフォームに必要な情報を記入し、送信することで入会の申し込みが可能になります。

以上、進める会のホームページを簡単に紹介しました。

中国文化財返還運動にご関心のある方や、進める会のこれまでの取組内容を知りたい方が、よりご利用しやすいよう、今後ともお役に立つ情報のご提供や、内容の充実に努めてまいります。ホームページの改善に関するご意見・ご希望などがございましたら、お寄せください。

なにとぞ、当会ホームページをご活用いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

（張瑞参）

アドレスはこちら <https://cbunkazaihenkan.com/>

進める会 11.11 集会のお知らせ

皇居内に隠されている〈もの〉を探る

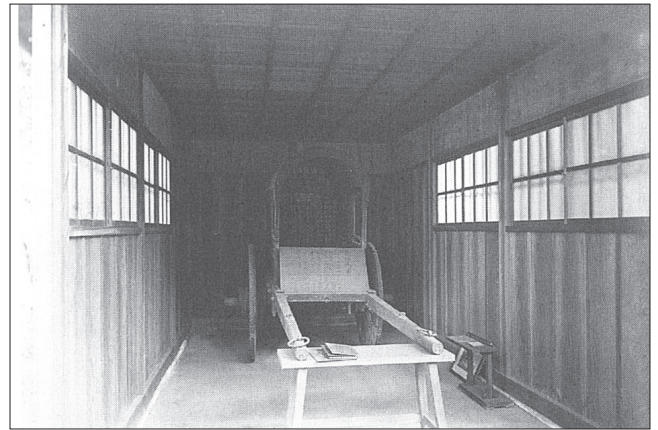
日本の水準原点が設置されている「国会前庭」の北地区から桜田濠を隔てて鬱蒼と茂る緑地を臨むことができる。このエリア（吹上地区）には、かつてゴルフ場もあったという。その南端部に相当する場所に「御府」と呼ばれる建物が存在していた。「存在していた」と過去形で記すのは、正確ではない。なぜならば、「御府」の「戦利品収蔵庫」という本来の機能は現在失われているが、「御府」である建物そのものは現存しており、建物の内部に収蔵されていた様々な「戦利品」は失われたが、建物の外に設置された「唐碑亭」および「鴻臚井碑」などは現存しているからである。しかし「鴻臚井碑」を含めて、どのような〈もの〉が、どれほど現存しているかについては定かではない。なぜならば、ここ数十年の間、これらの現状を確認することができないからである。正確に言うと、皇族あるいは宮内庁職員などの限られた関係者以外に誰も「御府エリア」に立ち入ることができないからである。

「御府」に所在する「鴻臚井碑」は、国有財産である。しかし日本国の主権者である国民も、国民の代表者である国会議員も「鴻臚井碑」を見ることすらできない。まことに理不尽な事態である。

「御府」に収蔵されていた膨大な戦利品・記念品はどうか。これらは「輝ける戦勝」における「栄光の記念品」であったが、敗戦によって「略奪品」に一転する。連合軍最高司令部（GHQ）は日本の非軍国主義化を進めるため、全国にある戦利品の一掃を日本政府に指示した。（井上 亮 2017『天皇の戦争宝庫』207頁）

そして1946年5月および6月に収蔵品は処分された。しかし処分された収蔵品はどれだけあったのか、そのリスト（目録）は一切残されていない。ただただ戦争犯罪の痕跡を一刻も早く消去させようと、慌ただしく処分がなされたことが伝わるだけである。これは、同じような性格の靖国神社における戦利品処分とも共通する。

靖国神社に現存する戦利品である大鳥居脇の「石獅子」を紹介する文献には、「靖国神社陳列戦利品」として「獅子石」と「荷車」の絵が描かれている（東海林 次男 2022「靖国神社・山縣記念館所在の狛犬について」『中国文化財の返還—私たちの責務』15頁）。これは当時の中国の絵入新聞『点石齋画報』に描かれたものと同じと思われるが（鄧 捷 2022「中国側の資料から見た靖国神社最古の狛犬」『中国文化財の返還—私たちの責務』32頁）、ここで描かれた荷車は、振天府の付属施設として紹介された「支那車置き場」に置かれていた「支那車」ではなかったか（井上 同：44頁）。あるいは



「支那車置き場」（井上亮『天皇の戦争宝庫』ちくま新書より）

は「遼東半島の金州城の鎧門」として紹介された「戦利品」（井上 同：42頁）は、現存するのだろうか？ 北洋艦隊の拠点であった威海衛の海軍公署から持ち込まれたとされる「長さ約22mの旗竿」は、現存するのだろうか？ こうした様々な疑問が、「立ち入ることができない」「実際に確認することができない」という一点で、解決していない。

過去の軍国主義の残存物が引きずる「暗い闇」が、未だに東京の一角を覆っている。

広く世論を喚起して、こうした膠着した事態を打開するためにも、私たちは『天皇の戦争宝庫』を通じて知ることのできた事柄を、さらに広く多くの人たちと共有して、「暗い闇」を少しでも払拭して、「あるべき〈もの〉を、あるべき〈場〉へ」戻すことにつなげていきたい。

（五十嵐 彰）

中国文化財返還運動を進める会 11・11 集会

講演* 井上 亮（日本経済新聞社編集局 編集委員）

「知られざる皇居の慰霊施設『御府』」

訪中報告* 「文化財略奪の現場をたずねて」

とき* 11月11日（土） 13時30分開場
14時～17時

ところ* 日比谷図書文化館 4F スタジオプラス
（千代田区日比谷公園1-4 日比谷野音そば）
地下鉄霞ヶ関駅、内幸町駅ほか

●オンライン参加も可能です。お問い合わせは以下まで

主催* 中国文化財返還運動を進める会

E-mail info@ichinoselaw.com

https://cbunkazaihenkan.co